



第17回 健康長寿のまちシンポジウム 基調講演

● 基調講演 ●

「災害を乗り越える連帯とシステム」
～新潟県中越地震の経験から～



社会福祉法人長岡福祉協会

高齢者総合ケアセンターこぶし園総合施設長 小山 剛 氏

(小山) 皆さんこんにちは。紹介をいただきました小山です。ちょうどこの土曜日に足立区の災害ボランティアの人たちに同じような話をしました。2年たってもまだこういう話をする機会があるのだなと思っています。もう結構忘れていたりしますが、先ほどのような映像を見ますと、皆さんは、「こんなことがあったのか」という見方をされるのですが、私どもはいやな思いがよみがえります。

今日のテーマに沿ってお話します。2年以上もたっていますが、実際にまだ大勢避難所に残っていらっしゃいますし、被害から完全に復旧したかどうかということになると、個々には完全にしていないところもあります。ただほかの地域に役立つことがあればと、今日もお話しさせていただきます。地震そのものについては、後ほど市の方のお話ですが、被害状況については先ほど映像が流れましたので割愛します。(資料-1)～(資料-8)

＜こぶし園被災時の状況＞

私は老人ホームの運営者ですので、その立場からどうだったのかということ。また地域社会へのサービスも多いものですから、施設の中にいる人という話だけではなく、地域社会の中で介護状態にある人をどう支えられるか。そうしたことをどうしてきたのかという話を皆さんにお伝えします。(資料-9)

ちょうど私は地震のときに東京の茗荷谷で会議を開いていました。東京もかなり揺れました。揺れたときに、「場所はどこだ」と言い合っていて、誰かが携帯電話で探し出して、「長岡だ」と言いました。私はそのとき、自分でも不思議な行動をとったと思っています。携帯電話は持っていますが、それには触れずに、すぐに外に飛び出て公衆電話を探しました。どうも災害時は有線電話のほうがつながるという迷信めいたことが自分の体の中にすり込まれていたようです。最近、公

衆電話は少ないのですが、運良く目の前にあって園に連絡を取りました。ちょうど電話をとった女性の事務員の人が、「ぎゃー」と叫び声を上げました。「どうした?」と聞くと、「また来ました」と言ったのが、3回連続できた大きな地震の、その2回目のときでした。ちょうど私は信号機のある交差点で電話していましたが、その信号機が落ちるのではないかと思うくらい揺れているのを見て、これは相当ひどいことになっているのだなと思って、何とかして帰ろうと思いました。

当然、新幹線は動いていない。これは想定できますね。帰る道筋として、「これは車だな」と思って東京駅に向かいました。ホテルで荷物をまとめて東京駅に出て、何件も断られて、やっと何件目かのレンタカー屋さんに頼み込んで車で高速に向かいました。

やはりラジオが役に立ちました。高速道路を走っていたらNHKのラジオで、「ただいま十日町に入りました」という放送が流れて、「ということは長野県回りで行けるのだな。そっち回りで帰ろう」と、高速道路を長野県方向に走りました。長野県方向に行くと、すでに夜中の10時か11時だったと思いますが、パトカーを挟んで群馬県警の機動隊の車が新潟県に向かってたくさん並んで走っていました。ドキドキはしましたが追い越しました。追いかけてこなかったですね。よかったなと思っています。そのまま走って行くと高速道路のあちこちで「降りなさい」「降りなさい」という表示が出ていました。でも入ったのが早かったので柵が出ていないのです。これはまだ走れるなと思って、無視して走って行きました。そうして新潟県に入って長岡から3つ目か4つ目手前の柿崎という海側のインターチェンジまで行くことができました。

そこから先は真っ暗闇でした。電気という電気は一つもついていません。もちろん信号機もついていません。道や橋がいきなり落ちてたりして怖かったです。さすがに地元に戻

ると裏道も分かりますから、田んぼ道を走ったりいろいろなところを走りました。一番怖かったのはトンネルです。トンネルの中で余震が来たらつぶれて死ぬのかなとか、そんなことを考えてトンネルだけはめいっぱいアクセルを噴かせて一瞬のうちに飛び出ようという感じで走りました。

夜中の1時過ぎだと思いますが、園に戻ると職員がいっぱいいました。すごく安心しました。道中で何回か指示はしました。認知症のグループホームをいくつか運営していますし、障害を持った人たちが住むようなバリアフリー住宅も運営しています。本体の老人ホームはそれほどひどくはなかったと言っていたので、その人たちを、そちらへ集めてくれという指示をしていました。私が戻ったときには、皆さん老人ホームに来ていました。

スタッフも集まっていました。夕方まではもっと大勢いたらしいのですが、泊まり込みのために50人が残ってくれていました。どこでも災害のときの緊急連絡網としてトーナメントの組み合わせのような表を作ります。あれは役に立ちません。電話は使えなくなっていましたから、あのような連絡網は役に立たないということがよく分かりました。火災などのように1か所がどうこうというときはいいのですが、社会全体がやられる災害に連絡網は意味を持ちません。そのときにスタッフがみんな集まっていたのはうれしかったです。これは完全に職業倫理です。何かあったとき、自分の家族の安全を確かめたら、とにかく職場に集まる。これが当たり前の行動だったのだと思います。私たちは製造業ではありません。目の前の生きている人をいつも相手にしている仕事です。その仕事を選んだ以上、当然集まるのが当たり前です。こういうときは集まるようにというものを渡されないとか来ないような職員は最初から採らなければいい。当たり前の行動ができるようになってるのがマニュアルです。紙を見ながら動くことはロボットでもできます。そうで

はなくて人間が動くのですから、マニュアルなんかなくても動くのが、当たり前行動だと思っています。それをみんながやってくれたことで安心しました。(資料-10)

これも私はすごくうれしかったのですが、私が着いたときに、玄関先で蠟燭の明かりの中でみんながわいわいやっていました。それは朝ご飯をどうやって配るかという話し合いでした。ちなみに私のところは3食365日配食サービスをしています。みんなで園内の食事ではなく、この外の食事をどうやって配るかということを地震当夜の真夜中に話していました。水はどうするのか、使い捨て容器はどこに置いてあるのか。普段は専用の容器を使いますが回収できませんから、使い捨てでどう対応するかとか、材料は何日持つのかとか、そんな議論をやっていました。

その中で「ヘルパーはどこに行ったの?」と聞くと、「在宅を回っています」と。当然の話です。24時間介護は続きます。あの地震のさなか、スタッフだって被災者であるにもかかわらず、仕事は連続して継続されるということを思っていたということがすごくうれしかったです。

通所介護事業もやっています。私のところのメリットはそういう外の事業もたくさんやっていることです。通所介護事業所は泊まり込みをやっているところではなくて、昼間しか使っていないところです。当然、水が止まって電気が止まれば、そこに来てもしょうがないわけです。ということで、そのスタッフが一時的に救援に使えました。自前で何とか救援隊が作れたということがメリットだったと思っています。

というように、日頃と同じことを地震のときもしていたのだなと思いました。

(資料-11)

・地震後の対応

地震後どういうことをやったのか。23日の夜中にみんなで協議したのは、在宅で千人く

らいの方をみていますが、その人たちがどこに避難したのか、あるいはそこで何のサービスが必要なのかをみなければならない。ということで翌朝、手分けをして在宅を回りました。その結果、76人の人を受け入れました。ショートステイで来ていた人が帰るのは無理です。ということは80人のショートステイの人がいて、またさらに入って、さらに在宅での生活が困難な人が入る。ということで、布団はどこにあるかとか、どのくらい敷きつめられるかということをまじめに議論しました。

翌日からそういう仕事に入りました。私も一般の避難所と違い、要介護状態にある人の中でも特に重い人たちをみるというのが基本スタンスです。要介護度3・4・5の人をメインにみているので、そういう人たちをみようということでした。

27日、28日あたりでサービスを再開しています。私は社会福祉法人の立場として、一つ注意しなければならないと思っていることがあります。スタッフに言ったことは、緊急事態は支えなければならないけれども、緊急事態が終わったら早く返しましょうということです。介護者と要介護者がけんか別れをした、または介護者がつぶれたという人を受け入れたのではないのです。地震で自宅の水が出なくなった、電気が止まったという人を受け入れただけです。だから電気がついたら戻さなければいけない。それをいつまでも私たちが抱え込んでしまったら、介護状態を壊すことになりはしないか。そのほうが怖かったです。ですからとにかく早く返そうと。そのためには支えるサービスも早く戻そうということで、業者に入ってもらって、建物などをチェックしてOKが出た順に戻していきました。

やはり認知症の人は大変でした。認知症というのは、「ここはどこ?」というような障害です。その人が全然知らない施設に来てともまどうだけです。グループホームにいたと

きにはトイレも自分で行くことができていても、老人ホームに来たとたんトイレが分からない。そうすると職員が付き添わなければならない。ですからグループホームは二人夜勤体制を組んで大変な思いをしました。認知障害の人たちをもっとひどい認知障害にさせるようなことはしたくないですから、とにかく早く戻さなければということで戻しました。

28日に国土交通省の担当者が仮設住宅を造るという話を持って来られました。何かアイデアはないのかという話もありました。彼らにも住宅だけでは支えきれないのだろうという思いがあったと思います。一番大きいところは1200人が住むと言われました。1200人というと1つの村のサイズです。山古志村は人口2000人の村です。日本で一番小さい村は、東京都にあって確か200人をきっています。そういう行政サイズがあるわけですから、当然そういうサービスも必要だという話をしました。長岡市の方とも議論をさせていただいたし、厚生労働省にも連絡をしていろいろ伺いました。このときそういうサービスも必要なのだというので、その場でみんなが同じ思いを持っていたということはすごいことだと思います。そこまではいい話でした。しかし「じゃあ、金は誰が持つのだ」と言ったら、これは一人も持つ人がなくて、大変な思いをしました。そんなこんなでいろいろなことがありました。

すぐに返すのだということを目指していましたので、10月末にほとんどの人が帰っています。もちろん長期的にみなければならぬ人は相当数残りましたが、とりあえず電気がつかないとかそういうことが理由で来た人たちはみんな帰りました。

そのあと、体育館や公民館に避難している人たちが、1週間もたって、そろそろ疲れ切っているのではないか。その人たちの中に本当に必要な人がいたら支えようということで、再度、スタッフに避難所を回ってもらい

ました。そこでおもしろいことが分かりました。新潟のジジババは強いです。映像を見ても思いませんか。あれだけの被害を受けた人たちの受け答えではないと思うくらい余裕を持っていらっしゃる。あの感覚は皆さんには分からないと思います。私は地元の間人ですから納得できることがあります。東京都で30センチの雪が降ると全員被災者ですよ。ね。「大変だ、外なんかに出られない」と言うわけです。山古志村では2メートル、3メートルが普通の雪です。お年寄りが一人で一週間や十日、一人きりになるなんて当たり前のところですよ。ごくごく普通のことなのです。あれを考えると、「私たちは、毎年災害を受けていたのだな」と。回りの人たちから見ると災害ですが、私たちはそれが普通の暮らしです。だから普通の暮らしの中での出来事がそのままつながっているだけで、たいしたことじゃないのと思うのか。雪が30センチ降ったらもう死んでしまうと思っているのとの違いだと思いました。それくらい高齢者の皆さんは比較的元気でした。

その中で、実は山古志村の人が、長岡市内に避難するというので、5か所に分散して逃げていたのですね。当時は行政区が違って、山古志村という単独の行政区でした。山古志村の人がどうしているのか誰も知らないわけです。村の責任で動いていますから。ところがうちがある避難所でサービスをやってたのですが、スタッフが「もう、死ぬ」とか言うのですね。山古志村で介護が必要な人を1か所に集めたそうです。ところが介護をする人がいない。社会福祉協議会のホームヘルパーさんしかいなかったわけです。その人の交代要員がいるはずがなく、ひたすら背負うのですよ。私どもが行ったときにはボランティアの人たちが動いていました。右往左往しているからめっちゃくちゃ人いるのですが介護人は一人もいない。あとでまとめのときに言いますが、ボランティアの人がいきなりやって来て、「さあ、おむつを変えましょ

う」なんてあるはずがないのです。皆さん、見ず知らずの人におしりを見せたいですか？

それはやっぱり馴れた人です。自分のそういう生活をゆだねるとき、馴れた人でなければいけません。それがいきなりやってきた人にそんなこと冗談じゃないと思うのが当たり前です。結局、集まった人は荷物を運べるけれども介護ができない。介護は一人しかできないという世界で皆さんが困っていたという状況にぶち当たりました。ではそれを整理しませんかということで、県と山古志村と私どもが協議をして、資料にあるとおり動いたということです。(資料-12)

これは当時のこぶし園の状態です。(資料-13)～(資料-20)

スペースというスペースはたいていこういう状態でした。認知症の人は一つのグループとしてまとめていました。それでもやはり場所が分からない。トイレが分からないなどいろいろな障害が続いていました。

このとき、もう一つ分かったことがあります。私は今、社会福祉法人として介護事業もしています。例えばデイサービスセンターを一つ閉めて緊急対応をしますとします。そうすると緊急対応の人の仕事は、入所者と同じ扱いでやりますが、デイサービスのようやり方は無理です。デイサービスは休んだ分だけ赤字になります。措置の時代ですと補填していたでしょうけれども、介護保険は補填をしません。民間事業者の人たちも私たちも、社会貢献のため、お店を閉めて頑張りますと言っても、「ありがとうございました」の一言でおしまいです。頑張って店をつぶすということもあり得ます。それを考えると保険か何かを作らなければならないのかなと真剣に思っています。災害保険のようなものをきちんとつくっておかなければ、介護保険事業者が持つのも大変だという気がします。

・東北福祉大学のボランティア

私たちは仕組みとしてはいろいろなサービ

スをやっていたから、何とかカバーしていましたが、実態は大変でした。それがサンダーバードという仕組みづくりにつながります。先ほど自分のところのスタッフを使ったと言いましたが、そのサービスはなるべく早く復旧させようと思いましたから、サービスが復旧するとスタッフは元に戻ります。ですが緊急カバーしなければならない人たちがまだたくさんいるわけです。それを支えるスタッフはいません。どうしたらいいのか考えていたときに、私は東北福祉大で教員もしていますので、「手伝いに行くよ」と連絡がきました。最初、学生たちが来ると言われたので、「いない」と言いました。で、社会福祉協議会のほうへ回ってもらいました。いないと言った理由は、手伝いに来てくれる人の衣食住、食べるもの、出すところ、お風呂、寝る場所。これは誰が用意するのですか。もし、ボランティアに来る人にそれだけの用意ができるのだったら、緊急避難の人に回しますよ。だから「来られても迷惑だから来ないで」と言いました。そんな話をしていたら、全部持って行くという話になりました。「全部、持ってくるなら来てよ」と、まとめて来てもらうことにしました。(資料-21)(資料-22)

私どもの施設の隣の駐車場を使って、電源と水道をつないでプレハブで40畳の二階建ての住居を持ってきてくれました。1階に男子学生で2階に女子学生と学生25人～30人が1チームで教員が3～4人ついてきます。そこで10日間みっちりボランティア活動をする。10日たつとまた別のグループがマイクロバスに乗ってやってきて入れ替わりで帰っていく。こういう循環でやってもらいました。これは役にたちました。そしてとにかく体育会系の人間を出せとお願いしました。体育クラブ系の屈強な男の子がほしい。これは後片付けの役に立つ。それから介護をやっている女の子たちもほしい。そっちは介護の現場に回すからということで送ってもらいました。学

生たちにも好評でした。それはそうなのでしょう。10日だけでいいのですから。学校がお金を出してくれて、授業扱いで10日間そこにいればいい。学生たちにとってもいい学習になったでしょう。学校にとっても実践の場になったでしょう。受ける側としても一円も使わなくていい。これはありがたいです。(資料-23)～(資料-27)

これは自衛隊と同じです。自衛隊がなぜ災害救済の役に立つかという、全部自前だからです。寝るところ、食べる場所、出すところと全部自分で持ってくる。だから役に立つのです。災害救助に、「千人分のご飯を用意してください風呂を用意してください寝泊まりするところを用意してください」なんて言われても、被災者側には無理です。自衛隊は完結型で来てくれるから役に立つのです。ですからこういうサービスも完結型で来てくれるということを望みたいと思いました。これを自動化する仕組みとしてサンダーバードというものに思いが移っていくわけです。

学生たちの良さはほかにもありました。例えば、仮設住宅の地図を作ってもらいました。職員もこういうものが作れないわけではありません。しかしそういう時間があったら、直接的な介護にスタッフを使うわけです。こういうことは学生が得意ですし、どんどん介入できる。そういった意味でもうまく

共同できたと思っています。住宅地図、被災した人の仮設住宅の地図ですが、写真では何も書いてありませんが、現物の地図はどうなっているかという、配食サービスを受ける人、介護がどういう状態の人かということを書いておくわけです。その中にチェックが入ります。(資料-28)

この中のチェックで、たぶんみんなが気づかなかったのだらうなというチェックが入っています。災害弱者という言葉がありますね。以前に樋口恵子さんとこの議論でセミナーを開いたことがあります。災害弱者と言うとき、普通、「女こども」と言います。災害弱者は女性と子どもだと言います。これは嘘です。災害弱者は誰だったかと言うと、中高年の男性です。一番弱かったです。この地図では50歳以上の一人暮らしのおじさんの家にはマークが入っています。そこに無理矢理こちらから押しかける。そうしないと孤立してしまうのです。今まで農業をしていて、嫁も来なくて、一人暮らしで頑張ってきた人が地震で逃げて来た。やることがないのです。田んぼ仕事はないし、話す人もいない。そこへいくと女性は不思議な性格をしています。みんな初めて会った人と、妙な話を平気でできるでしょう。でもそれは男性には無理です。初めて会った人なんて緊張して黙って下を向いています。だからそんな席に出たいと



思わない。みんな部屋に閉じこもって酒に走る。朝から晩まですることがないし、話す相手もない。何かしろと言われると「酒飲むだけだよな」という話になる。私は見ていて、そういう人のことを災害弱者というのだと思いました。そこは注意してやってきました。

そのほかに学生には体操のポスターや医療のマップも作ってもらいました。どこにどんな先生がいるかということが書いてあります。あるいはスーパーはどこにあるのか。そんなことも調べて作ってもらいました。学生たちは授業ですから、まとめもしました。やはりやったことは成果として、やった人たちにも残ってほしいし、そしてそれを地元の学生に引き継いでもらいました。引き継いでもらった理由は二つありました。一つは、雪がすごいところですから、冬場、仮設の中で雪を経験したことがない人たちに動けと言っても無理だろうなというのが一つ。もう一つは、2か月もたつといつまでも被災者面していられないのです。いつまでも助けてと言っている立場ではない。もういい加減自分たちで立ち上がらなければという時期です。だから地元の連中で頑張ろうというように切り替えました。(資料-29)～(資料-33)

＜サポートセンター千歳＞

サポートセンター千歳というサービスセンターをつくりました。かなりの持ち出し仕事でしたが、なぜしなければならなかったかという、「地域社会の満足」ということです。CS（カスタマー・サティスファクション）という言葉は一般企業の方なら当たり前だと言います。どんな職業だって、利用者が満足しなければサービスは買ってもらえません。まずいラーメン屋に客は来ません。客が満足するような美味しいラーメンを出すからラーメン屋に人が行くのです。社会福祉の仕事も同じはずですが、実は社会福祉の仕事はこれにはあまり関与していません。措置とい

うのは、相手の満足度とは関係ありません。社会全体から集めたお金を効果的に分配する方法です。ですから一人一人の満足度という意識ではなかった。私たちの仕事の中で、一番意識が薄かったところかもしれません。しかし介護保険が導入されて7年目です。これは当然、利用者の満足に比例する仕組みですから、意識を変えなければならない。そういう意味で、CSというものがあります。(資料-34)(資料-35)

社会福祉法人には、もう一つCSがあります。それは「コミュニティー・サティスファクション」です。地域社会全体が満足することに対して投資をする。それが私たちの本来の仕事です。そうでなければ非課税団体である理由がないです。創始者が土地を提供したから、ずっと非課税なのだという、そんなばかな話はないです。社会福祉法人の意味は何かというと、社会全体が満足することに投資する。あるいはそれが制度化されていなくても、目の前のユーザーのニーズにチャレンジすることです。それが制度となっていくかは、あとの問題です。自分たちでやってみて、あるいは地域のひとと力を合わせてやってみて、これはいいことだけれどもお金がないというときに補助金ですよ。そういうふうに動かなければならないと思っていました。(資料-36)

今回の災害のときに社会福祉法人の立場として、明らかに赤字になることが分かっている投入しているというのは、当然、私たちの仕事としては当たり前のことだと思っているからです。ただ、一法人とか一施設でかぶるような中身ではないということは思っています。社会全体でとか、そのグループ全体でとか、やり方は変えなければならないと考えています。でもチャレンジすることは責任だと思っています。だからチャレンジしていたということです。

しかし災害救済のためのサポートセンターという発想は、特に災害時だからつくったと

いうわけではありません。私は日々、人を支える仕事をしています。その仕事は24時間連続しなければなりません。365日休めない。休める仕事ならオプションでいいと思っています。本来支えなければならない仕事に休みがあるはずありません。どこの病院、どこの施設を探しても休みはありません。在宅も同じです。休めるということなら、ほかの要素を加味しているのだから、主たるサービスではないと思っています。主たるサービスとして提供するのが私の役割です。それをずっとやってきたわけです。当然、1200人の固まりができれば、その中にも同じ仕組みが必要だということです。

そこでやっていたサービスは資料のとおりです。基本的には全て必要だということになります。(資料-37)～(資料-39)

みんなが必要だと思ったのです。行政の煩雑な手続きも簡略化してみんなで同じ方向に動きました。市からの支援や制度の認可は素早かったです。これはみんながそう思っていたからです。そういうふうには社会の意識が変わったことはいいことでした。ただお金の出所になるとみんなシビアになりました。どこも責任を持って財布から出せない。最初に設備投資したときに、2000万円の持ち出しになりました。誰がどう出すか、誰も責任が持てなかった。そうこうしている間にも日がたってしまって設計もできない。とりあえず「えいやあ」でやろうという話で、うちで2000万円を出しました。理事会も通さずに理事長に電話一本で、「こういう状況だから我慢してくれ」という話でやるわけです。私などは、お金が返ってくるまでどきどきです。そんなことをしながら動きました。あとで赤い羽根や長岡市の協力で1700万円ほどバックがありました。

ただ、人件費は丸ごと持ち出しになりました。5000万円ほどかかりました。なぜ赤字になるかは、このあとよく分かります。(資料-40)

サポートセンターの航空写真があります。だいぶん壊しましたが、両側に家が建っていて、真ん中に空間があります。これは雪を捨てるところです。今年、雪が出ると本当に困るのですが、地震のあとは平年通り降りましたのですごい雪でした。平屋建てのプレハブが密集するわけですから、ここに雪が降ると身動きできなくなります。(資料-41)(資料-42)

300平米のサービスセンターをつくっていただきました。これは集会所を拡大解釈して建てたという建前になっています。管理者は長岡市、市長さんの管理になります。みんなが使うべき集会所を、占有許可を出してサービスセンターとして使わせていただいたということです。(資料-43)(資料-44)

雪が降るとこのようになります。朝降り出して夕方にはこんなになります。(資料-45)(資料-46)

日本全国、こんなふうになったら「わー、もう仕事なんかできない」という話になります。転んでけがをする人が100人、200人出てくる。皆さんのところでは災害です。しかし私たちはこういう世界に住んでいますから災害ではありません。ただこんな感じで降り続くから、度々雪をどけないとならないので仕事ができないというのも事実です。もっともっと雪が降る中で、もっと人がいないところに住んでいた人たちのところに地震の中心地があったわけです。そうした意味では、じいちゃん、ばあちゃんは、強かったと思うわけです。(資料-47)

サービスセンターにはユニットの浴室が3つ、食堂、ホール、配食もやりましたので3食作れる厨房の設備もあります。これも普通の集会所にはついてきません。(資料-48)～(資料-51)

ここに子どもたちが来るようになりました。仮設住宅は立派な壁がついているわけはありませんから、子どもが騒げば隣に響きます。親がしかりつけるので子どもは騒げな

い。子どものフラストレーションがたまりますが、親もたまります。そんな話が聞こえてきました。だったら遊びに来ればいいという話をしたら、だんだん子どもが来るようになって、宿題をする場所になっていたりしました。(資料-52)

写真の左上にいるめがねをかけた優しいお父さんは岩手県の県立看護大学の教授です。(資料-53)

いろいろな人が入っていましたが、直接的な人員補填に来てもらったわけではありません。私は知り合いに「経験をしに来ませんか」という案内をしました。私たちは責任を取る立場ですから、赤字覚悟で職員は常駐させます。職員が欲しかったわけではありません。こういう経験をする人が多ければ、次に何かあったときに役に立つのではないかとということで、いろいろな人たちにこの中に入ってもらいました。いろいろな県の方、いろいろな職種の人が活動しました。子どもたちの遊び場、近くに住んでいる人たちのお茶飲み場にもなりました。(資料-54)～(資料-57)

写真の餅つきをしているこの二人が典型的な災害弱者と言われる人になります。(資料-58)

こういう役割を付けないと社会に出てきません。何もしなかったら一冬ずっと部屋の中です。男の人はそういう意味で面倒です。建前をつくらないと来られない。女の人は、「お茶でも飲みませんか」と言うだけで「はい」と集まって来て話して帰る。放っておいても大丈夫です。しかし男の人は、「あなたが必要なのよ」ということを言わないと、なかなか出て来ない。そういう場所づくりが大切だったと思っています。ちなみに大学に「体育会系をよこせ」と言ってありましたので、後ろに立っている学生は今楽天ゴールドイーグルスに入っています。

あとは、配食サービス、初年度の元旦の写真です。地震が起きて2か月後、仮設に入ってから数週間、サービスを手伝うといったときに

顔つなぎをするのにちょうどいいということで、簡単なおせち料理を作って、「何かあったら言ってね」と言って、元日に一人暮らしの家を回りました。今年も持って行っています。写真は普段使っている配食の容器です。(資料-59)(資料-60)

私どもの配食センターはあちこちにありますが、そこで毎月試食会を行っています。食べている本人が美味しいまずいと言ってくれるようになるのには、あと10年かかります。ここにいらっしゃる中高年の方が、同じサービスを使うころには、「まずい」とか「もう一品増やせ」とか様々なご指摘をいただくはずですが、今このサービスを使っている方々はそういうことを言うことは社会的に悪だという教育を受けた人たちです。社会に文句を言うてはいけません。黙って耐えるのが美德だと教え込まれた人たちが今のユーザーの中心です。だから聞いても「美味しいです」と返ってくるのであまり意味がありません。その人が文句を言ったら、それはむちゃくちゃひどいサービスだということです。

そう考えるとその周辺にいる人たちの評価を得るということが実は大切です。それでセンターでは試食会などを頻繁にやっています。当然、仮設の人たちにも配っていますので、仮設の中にいる人たちにも集まってもらって、普段こういうものを食べない人に食べてもらってどうだという話を聞く。そんなこともしていました。(資料-61)

仮設住宅の中ではデイサービスもやっていました。(資料-62)(資料-63)

「どうだ」というような顔をしたおじさんがいます。例えばこのように「これは、俺にしか編めないのだ」というような役割分担が必要です。この人を放っておくと家の中でお酒飲んでいるだけです。そういう人たちが社会に出てきて、自分の役割を持って周囲に認めてもらうことが大切です。(資料-64)

さてそれではどうして赤字になるのかという話をします。この中でずっとやってきた中

心的な仕事は介護予防です。あの雪の中で80歳、90歳の一人暮らしの人が6畳一間のこたつに潜り込んで、一步も外に出なかったら4か月後、どうなっているか想像がつきますね。すごい言い方をしますが、介護保険事業屋さんという立場だけで言うと、何もしないほうがいいのですよ。黙って見ていて、「早く倒れないかな」と倒れるのをひたすら待って倒れたら飛んで行って、おむつを当てる。そうすると私は1回4020円の身体介護料金をいただけるわけです。しかしそれは本来私たちがする仕事ではありません。だから、無料だということも赤字になることも分かっているけれども、あの雪の中を車で迎えにいった広場に連れてきて、「さあ動きましょう」「体を動かさないと倒れますよ」と言って、毎日予防をやるわけです。でもそれは一円にもならない。この人を放っておいて倒れたら1回4020円の介護料金が入るということがありつつ、それをしないのが社会福祉法人です。

地域社会への貢献事業とはそういうことだと思っています。ですからひたすらこういうことに費やすわけです。当然、費やした分のバックペイは一つありません。当然のことだと思います。こんなことをひたすら行っているわけですから、お金は全然入らないということでした。でもお金を稼ぎたいからサービスをしたわけではありません。そこでそれをしないと利用者の人たち、地域の人たちが困る。だからするのだという立場です。

お金をどう補填するかは、このあとの議論です。災害救助法を改正するのか、あるいは社会福祉協議会という全国組織でやっていくのか。あるいは市町村単独事業でお金をだすのかどうか。その議論はあとの話です。やる前にお金をだすからこういうことをやりましょうということではないと思います。

そういうことでこんな仕事をずっとやってきました。おかげさまで、センターに入った1200人は一人も倒れていません。どこの新聞社だったかの一年後の調査の結果では、介護

状態も変わっていませんでした。やった甲斐はあったなという思いはありますが、赤字は残したという思いと両方があります。(資料-65)～(資料-76)

いろいろな人たちが手伝いに入ってくださいました。当然、食事指導もまじめにします。専門家の指導も入ります。(資料-77)(資料-78)

メンタルな部分でいろいろな団体に入ってもらいました。身体だけでなく心も支えたいということで、いろいろな種類の相談室ももうけました。しかし、じいちゃん、ばあちゃんの相談は少なく、次の世代の人たちのほうが来られたようです。この地域の生活に長年耐えてこられた人は強いのだと思います。しかし他の地域ではそうはいきませんから、やはりメンタルな部分を支える仕組みも必要だろうと思います。ちなみに「臨床心理士会の相談室」は月1回、「精神保健福祉会の相談室」は毎週でした。「医療と福祉なんでも相談室」は、私どもで児童、障害者全てにかかわる相談室を毎週開いていて、そのうちの2週をこちらで行いました。当然、専門家同士の勉強会もやります。(資料-79)(資料-80)

丸二年でこのサポートセンターをこれだけの人が使ったというグラフを資料に載せました。左下のグラフですが、5000人弱の人が介護予防を受けました。この介護予防が今の保険法改正に間に合っていたら介護予防費が入ったのですけど。間に合わなかったので自腹を切りました。しかし多くの人がここを使ってくれました。(資料-81)

＜災害福祉広域支援ネットワーク“サンダーバード”設立へ＞

何が私を突き動かしたかと言いますと、自己完結型で来てもらわなければ受け手が困るということです。「困っているのだ」「助けてくれ」という受け手の立場としては、本当に介護だけほしかったわけです。助けに来てくれる人の住宅などを用意する余裕はありません

ん。日帰りですら通ってもらうのが一番ありがたかったです。同業の人たちも助けに来てくれましたが、「泊まり込みは結構です。日帰りにしてください」と、お願いしました。泊まり込まれたら、その人の食事まで全部用意しなければならない。そんなゆとりはありません。

丸ごと持って来られる仕組みはつくれると思いました。冒頭に言いましたが、機動隊はその日に動いています。私より早く動いていました。あとで地元のホテルの人と話したら、ホテルのコンベンションホールにも布団を敷いて人が住んでいたそうです。被災した地域の人ではなくて、翌日から復興のために全国から送られた電気・ガス・水道の業者さんです。医療系も当日から動いています。警察も動いています。3日目にうちに入った給水車は札幌ナンバーでした。周りは自動的に救済しているのに介護は違うのです。介護は10日くらいたって、「手伝いに行こうか？」です。全て終了しています。「今更、何を言っているのだ」というのが本音です。(資料-82)

介護は自動ではないのです。たぶんいまだに介護は嫁がみるものだとすり込まれているのです。デイサービスはたまにやればいいんだし、ホームヘルプもたまにやれば何とかなるだろうと思っている。それは家族がいると

いうことを想定しているからです。介護は放っておいても誰かがみている。そういう誤解があったのだと思います。現実はありません。本当に最初のときにこないと役に立ちません。何か起きたらすぐに飛んできてほしい。ほかのサービスと同じように自動的にこういうことが起きたらルーチンでこれだけ来る。そういうことができていないと支えられません。そういうことに気がついたわけです。これは何とかしなければならない。しかし公的な仕組みで出来上がるものだろうかと思うとそうでもありません。

そこで考えたのがサンダーバードという仕組みです。昨年の12月8日にやっと NPO になりました。今やっているのは「災害対策意識の啓発」です。こういうことに注意が必要だということをやっています。先ほど言いましたが自己完結型でほしいのですが、さすがに背中に家を背負って行くわけにはいきません。テントを背中に背負って、一年分の食料を持って来るというわけにはいかない。ですから受け手の側も自動化したかったということが目的です。(資料-83)

例えば、キャンピングカーです。災害が起きたとき、このキャンピングカーを被災地に百台、千台送り込めばいい。そこを拠点に動くという拠点づくりです。今どきのキャンピングカーはトイレもシャワーも付いていま



す。寝泊まりできます。ご飯も作れます。このキャンピングカーは誰が造るのか。それは例えばトヨタ自動車さんとか、日産自動車さんでいいじゃないですか。真っ赤に塗ってトヨタ書いてと宣伝してくれればいいじゃないですか。彼らはコマーシャルフィーとして年間に大金を使っています。地域の社会貢献活動とコマーシャルだと思ったら、何兆円産業の中でのキャンピングカー100台はたいした額ではありません。その代わりしっかり宣伝すればいいのですから。カーレースのF1は宣伝効果抜群の場所です。胸にワッペンを一枚付けて数千万円の宣伝料です。これと同じでキャンピングカーの車体に例えば「ハウス食品」と書いて、この中の食べ物全部ハウス食品さんが提供します。飲み物は例えば三国コカコーラさんが提供しますと宣伝すればいいのです。企業の社会貢献とはこういうことでしょう。

でもこれは公務員的なやり方ではやってはいけないことです。企業の営利目的に荷担するわけにはいかない。NHKが放送するとみんなほかに映す。そうでなくて企業として協力できることは、たぶんそういうことです。企業としてこういうことに力を入れていただいて、所有していただいていて運んでもらう。あとはこれを運営する側の組織をつくれればいいだけです。そして人を同時進行で送り込む。この人の住まいはキャンピングカーです。こうしたものを企業とコラボレートしてやるということが今の社会の中で一番現実味を帯びていると思います。これを例えば、一万台全国に用意するから一万台分の税金をといたらたぶん駄目です。いつ災害があるか分からないのにそんな投資ができるかというような話になる。いいじゃないですかね。ハウス食品さんで宣伝のために毎年いくら出していると言えいいのだし、トヨタ自動車さんのコマーシャルフィーなんてめちゃめちゃ高いのですよ。トヨタだけではないですよ。たくさん企業があるわけですから、企

業の力を結集してこうしたところに投資してみんなの活動の場所をつくっていただく。

こういう方法がある、見本を作ってみせるといのがサンダーバードの役割です。私たちに運営する能力はありません。やり方としてこういう支え方があるのだということを今ひたすら作っているわけです。

人についても同じことが言えます。これはこのあとの議論にも出てくるかもしれませんが、外の人が直接、被災地に行っても役には立ちません。ナホトカ号の事故のように流れ出した油を拭きましょうというのは誰でもいいです。油を拭く作業は誰でもできるし、なるべく大勢で拭くと早く終わりますから意味があります。災害で人の生活を支えるというときに、わけの分からない人が来ても役に立ちません。掃除洗濯はできても介護はできません。それはできなくて当たり前です。ですから外の人と約束をしていて、外の人はその地域の施設などに手伝いに入る。ここは集団ですから、何人か入っても集団の機能を失うことはありません。その中で動けます。そこに外からの人が入った分、地元の人たちが、まちに出て行く。そうすると利用者のことが一番よく分かる人が出て行けるということだろうと思っています。(資料-84)(資料-85)

そういう組織を何とか立ち上げて、こういう仕組みでつくれるのだということを社会に提示したい。それがサンダーバードの目的です。今回の災害を実際に経験したことが、こういったものに結びついたということです。(資料-86)(資料-87)

雑ばくな話で時間がきてしまいましたが、パネルディスカッションで時間がいただけたら、補填をしたいと思います。こんなかたちで私の役割を終了したいと思います。皆さん、ありがとうございました。

スライド資料一覧

資料—1

災害を乗り越える連帯とシステム

～新潟県中越地震の経験から～

高齢者総合ケアセンターこぶし園
園長 小山 剛

資料—5



資料—2

10月23日

震源地 長岡市

17時56分 M6. 8 6弱

18時03分 5弱

18時11分 M6. 0 5弱

18時34分 M6. 5 5強

以降余震は3000回を超えた

資料—6



資料—3

★人的被害

死者6名 負傷者2108名

★火災

5件

★建物

全壊 1395棟

半壊 5537棟

一部損壊 42587棟

合計 49519棟

(12/16長岡市災害対策本部の報告)

資料—7



資料—4

★仮設住宅

①223戸 ①②計459戸

②236戸 1200人を担当

③ 20戸

④ 79戸

⑤ 30戸

⑥162戸

⑦ 57戸

⑧ 33戸

避難所は地区別

(12/16長岡市災害対策本部の報告)

資料—8



資料—9

こぶし園被災時の状況

資料—13



資料—10

火災対応の緊急連絡網は、地震時に役に立ちませんでした

そんな中でもスタッフ50名が夜勤を支えました

これはマニュアルではなく、職業倫理です

また通所介護事業所が生活災害のために休業しましたので、そこのスタッフが応援隊として使用できました

資料—14



資料—11

こぶし園のサービスは市内各所にあり
24時間365日
配食
通所
訪問介護
訪問看護
を提供しています

このことは地震でも変わることはなく
余震の中、訪問介護が市内を回っていましたし
翌朝の配食も普段どおり実施しました

地震の時、どこの施設でも夜勤者が泊っており翌朝の食事
も普段通り食べたでしょうから、在宅においても同じことを
支えるのは当然のことです

資料—15



資料—12

地震後の対応

- 10/23 グループホーム3カ所・バリアフリー4名本体に収容
- 10/24 居宅・訪問看護・訪問介護対象者のチェックと緊急入所受け入れ(特養100+SS80+被災者76=256)
- 10/27 出先の建物の安全確認とグループホーム上除の再開
- 10/28 デイけさじろ・永田・関原の再開
- 国の担当者と仮設住宅内のサービスを協議
- 10/29 デイ三和の再開
- 10/31 グループホーム三和の再開
- 11/01 市内の対象避難所にケアマネを派遣、疲労・介護の必要性をチェック
- 11/04 山古志村避難所からの要請でケアマネを派遣
- 11/05 山古志村の緊急入所5名受け入れとデイへ18名利用
- 11/10 県・市と仮設サービスセンターの協議
- 11/16 県・市と仮設サービスセンターの協議

資料—16



資料—17



資料—21

東北福祉大学のボランティア
2004.11.7～12.26

25～30人／1チーム
10日交代

資料—18



資料—22



資料—19



資料—23



資料—20



資料—24



資料—25



東北福祉大学学生ボランティア

資料—29



東北福祉大学学生ボランティア

資料—26



東北福祉大学学生ボランティア

資料—30



東北福祉大学学生ボランティア

資料—27



東北福祉大学学生ボランティア

資料—31



東北福祉大学学生ボランティアまとのミーティング

資料—28



東北福祉大学学生ボランティア

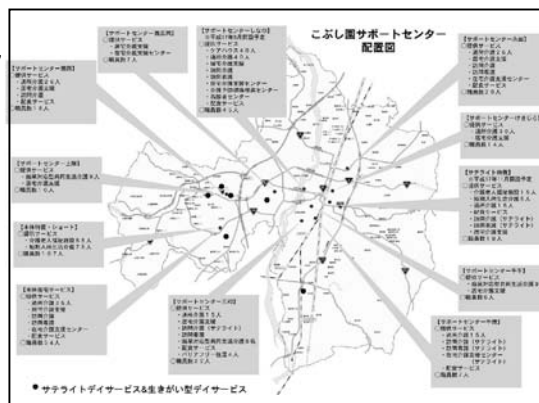
資料—32

東北福祉大学生から
地元学生ボランティアへ引継ぎ

資料—33



資料—37



資料—34

社会福祉法人の使命

資料—38

サポートセンター千歳 2004.12.8～

資料—35

使命(mission)はCS

Customer Satisfaction 顧客の満足

Consumer Satisfaction 消費者の満足

Client Satisfaction 対象者の満足

資料—39

サポートセンター千歳

通所介護(定員15名)
訪問看護
訪問介護
在宅介護支援センター
配食サービス
地域交流スペース
介護予防
心のケア
各種相談室

資料—36

Community Satisfaction 地域社会の満足

資料—40

災害救助法で大きな仮設の集会所を建設

当施設で浴室・厨房・送迎車両等整備
(総額2000万、後に1700万の補填あり)

但し人件費は全て持ち出し
(総額5000万)
介護3名
調理2名
相談員1名
看護師1名
管理者1名

資料—41



資料—45



資料—42



資料—46



資料—43



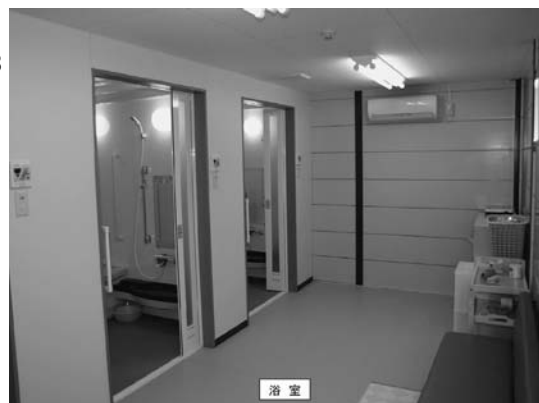
資料—47



資料—44



資料—48



資料—49



資料—53



資料—50



資料—54



資料—51



資料—55



資料—52



資料—56



資料—57



資料—61



資料—58



資料—62



資料—59



資料—63



資料—60



資料—64



資料—65



資料—69



資料—66



資料—70



資料—67



資料—71



資料—68



資料—72



資料—73



資料—77



資料—74



資料—78



資料—75



資料—79

専門職の支援

全国臨床心理士会の相談室
精神保健福祉士会の相談室
医療と福祉なんでも相談室

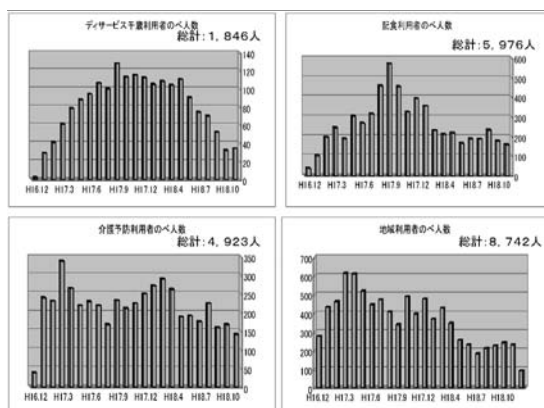
資料—76



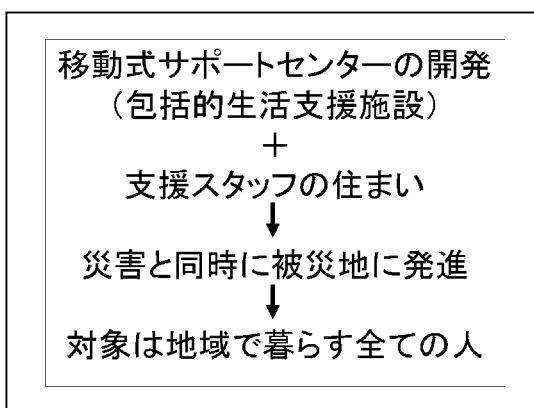
資料—80



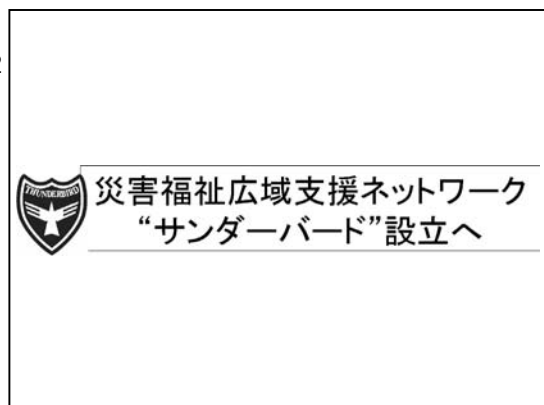
資料—81



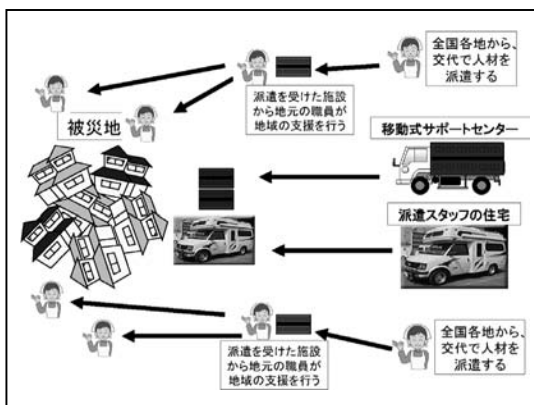
資料—85



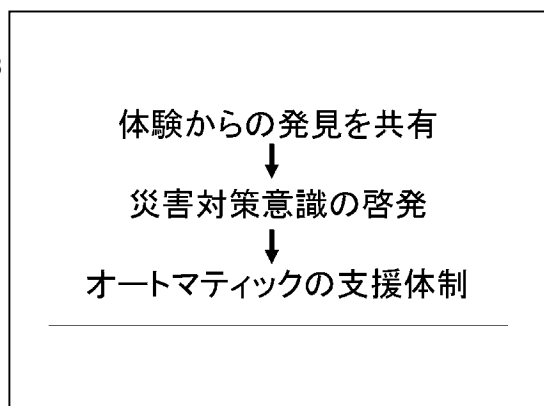
資料—82



資料—86



資料—83



資料—87

《年会費》
個人 5,000円
法人 50,000円

《お問い合わせ先》
事務局
〒114-0015 東京都北区中里1-14-2
ラ・アトレ駒込607
TEL 03-5832-5677 FAX 03-5832-5688
HP : <http://www.thunderbird-net.jp>
MAIL: hirata@thunderbird-net.jp

資料—84

派遣する人材

医療
医師・保健師・看護師・訓練士など

介護
介護福祉士・ホームヘルパーなど

相談
社会福祉士・臨床心理士・精神保健福祉士など